

特集インタビュー

日本らしい教育の在り方とは

～2020年教育改革を再考する～

九州大学大学院比較社会文化研究院教授 施 光恒

グローバル化が進む現在、欧米だけでなく

日本でも、グローバル人材育成が叫ばれている。そして、2020年度教育改革はこの目標達成のための手段として、日本政府が

大きく動いた政策の一つだろう。ただ、この改革の中では、グローバル人材に必要な能力として、「英語力」・「主体性・批判的思考能力・

創造力」が主に挙げられているが、これは欧米の教育方針に追随するものであると言える。

このような方針は、果たして日本人にとって良いものとなるのだろうか。

こうした問題の理解を深めるために、この度施光恒教授にインタビューをお願いすることとなった。施教授は教育改革実施前から、ご自身の著書で上記の問題を取り上げてられており、今回本政策が実施に至った中で、教育政策論的観点からこの問題をどのように

考えなのかお聞きしたいと思ったからである。

2020年教育改革とは

今年から、いわゆる「2020年教育改革」

が文部科学省のもとで実施されています。この背景には、AIのような科学技術分野の発展や、グローバル化が進行していく中で、

そうした変化に適応できる人材を作ろうという狙いがあるようです。この教育改革は、①新

学習指導要領の導入、②大学入試制度改革、③英語改革という三本柱で構成されています。

一つ目の柱である「新学習指導要領」の導入は、小中高でこれから徐々に始まっていくわけですが、そこでは自分で考え、表現し、

判断することに重点が置かれています。同様に大学でも、主体的で対話的な深い学び、す

なわち「アクティブラーニング」というものがとても重視されています。

二つ目の柱、「大学入試制度改革」では、従来のセンター試験から「大学入学共通テスト」というものに変わり、暗記よりも思考力を問う記述式の問題を導入することで、『学

力の3要素』（1.知識・技能、2.思考力・判断力・表現力、3.主体性）を評価しよう

としています。また、現在延期されていますが、今後民間の英語検定試験を導入し、「読む・聞く・書く・話す」の4技能から総合的な英語力も測ろうとしています。入学者選

抜も、従来の大学入試ではなく、「総合型選抜」というAO入試のような形態が増えてくるでしょう。

三つ目の柱である「英語改革」では、小学校5年生から英語が正式教科化され、また、

13 公共空間



図表 1 文部科学省が考える2020年度教育改革のイメージ
(北海道新聞社より：<https://mamataalk.hokkaido-np.co.jp/baby-kids/education/19443/>)

今まで5年生で実施していた外国語活動は小学校3年生から始まるようになります。そして、中学・高校の授業は基本的に英語で行われ、プレゼンテーションなどを取り入れていくでしょう。

要するに、この教育改革では、主体的・対

話的な深い学びである「アクティブラーニング」と、4技能重視したグローバルに通用する英語を身に着けさせることに重きを置いているのです。

教育改革が見落としているポイントとは「基礎知識＋アクティブラーニング」のバランスがとれた教育を

1. 基礎知識を軽視してはいけない

僕は、教育改革のアクティブラーニングにかなり疑問があります。一つは、考えるためには基礎知識が必要で、それが軽視されていないかということです。これは小中高だけでなく、大学に関しても同じです。

(施教授の勤務先である)九州大学でも、必須科目の課題教科目というのがあって、大学1年生から「アクティブラーニング」というのが必修科目になっているんですよ。大体50人でグループディスカッションを班に分けてさせるというかなり無茶な授業で、教員にはとても評判が悪いんです。学生にディスカッションさせても、非常につまらない意見しか出てこないんですね(笑) 社会問題とか、政

治経済の問題とかについて、何も知らないんですから。それで、僕が喋り過ぎて、学校から怒られたことがありました(笑)

やはり、基礎的なことを知らなければ、高度なディスカッションはできないし、アクティブラーニングにもならない。なので、基礎的な知識をきちんと身に付けた上で、アクティブラーニングをやるというバランスを考える必要があるのではないかと思います。

2. 実はアクティブラーニングは昔から日本にあった!

もう一つは、少なくとも、日本の小学校は昔からアクティブラーニングをやっていたということです。つまり、日本の小学校は昔から、詰め込みではなく、「班学習」で主体的に勉強させてたんですよ。これは下手すれば、多分アメリカなんかよりも進んでると思います。だから、今更アクティブラーニングかという感じが、日本の小学校レベルではするんです。一方、大学教育でも1、2年生は基礎知識を身に付けさせることに重点を置いていて、3年生からは、文系の学生ならゼミに参加しますが、このゼミというのは、まさにアクティ

ブラーニングなわけです。だから、今までも
バランスが取れていたと思うので、とってつ
けたようにアメリカの教育か何かを、流行っ
てるからという理由で、日本に持ち込んでく
るのはどうなのかと思います。

**英語を伸ばしたいなら、日本語から伸ばすべ
き**

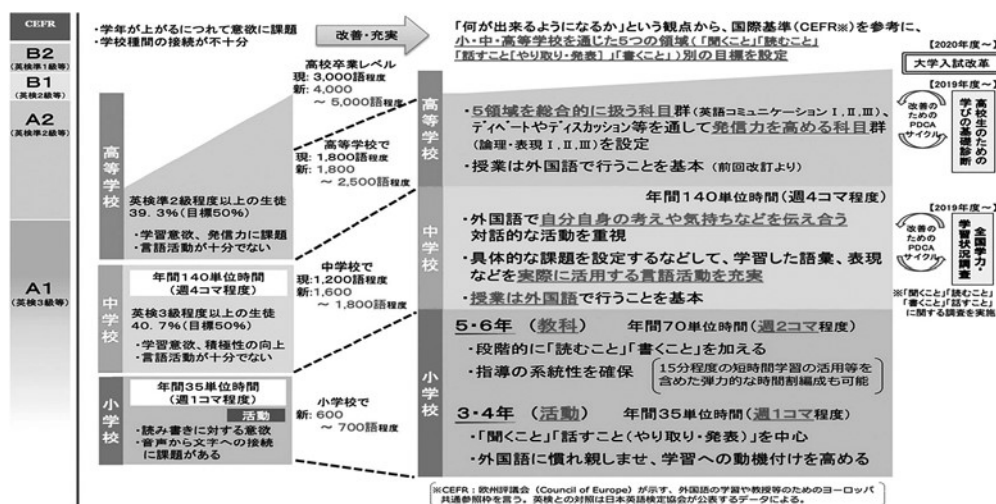
やっぱり、母語より外国語が上手くなるこ
とは無いと思うので、高度な日本語も使いこ
なせないうちから英語を学ばせることには疑
問があります。

——私も留学してて思ったのですが、結局英
語が日本語よりも上手くなるとことはなかっ
たなと思います。

そうなんですか。やっぱり母語がある程度
使えるようになって、思考力とかが深まって
いると、外国語も上手くなるんじゃないかな
と思うんですね。例えば、日本みたいに子
供がほとんど日常生活で英語を使う機会がな
い国で、漢字も書けないような小学校3、4

年生のうちから外国語活動を導入して、英語
を勉強させたところで、さほど効果はないと
思うんです。あと、英語教育については、割
と中学・高校の先生に、「6年間英語を一生
懸命中学・高校で勉強したのに、私は全く話
せない」とか、「日本の英語教育は文法重視
だからいけないんだ。聞く・話すに力を入れた
実践的な英語学習にするべきだ」とかって
文句を言う大人が多いそうです。

僕は、これは誤りだと思っています。よく
あげる例なんですけど、これは「体育の時間に
ソフトボールとか野球をやったけど、プロ野
球選手になれませんでした」と言ってるよう
なものなんです。学校の体育の時間に期待し
すぎというか(笑) 学校の体育の時間は、基
礎体力をつけて運動に親しませ、スポーツ好
き、運動好きの子供を作るというのが目的だ
と思うんです。学校の外国語学習の役割も、
それと同じじゃないかと思うんです。つ
まり、限られた時間で、日常生活で英語を全
く使わなくて良い環境の日本でできることに
いったら、言語の基礎体力、つまり、基礎的
な言語能力をつけて、将来の外国語学習や他
教科の学習に活かせるような土台をしっかり



図表2 外国語教育の抜本的強化のイメージ (文部科学省 発表資料より)

作るということです。そういう意味で、特に小学校では外国語学習という時間を作ってもいいんだけど、そこでの一つの目標は言語の基礎体力をつけさせることだから、日本語や、英語をはじめとする外国語に触れさせて、外国語の楽しさを感じさせるだけで良いんじゃないかと思います。そして、言葉の面白さというのを国語の授業との連携の中でつけさせるといって、そういうのを狙いにすべきなんだと思います。

英語教育は子供達を「ダブルバインド」にさせるのか —人間観・道徳観と密接に関わる言語の役割

もう一つ心理面で一つ心配なのは、日本語よりも英語の方がカッコいい、知的であるという子供が増えないだろうかということです。

——もうすでに増えてる気がします(笑)

そう、増えてますよね。だからこの改革は小学生にもそういうメッセージを与えてしまおうと思います。だから、日本語や日本語文化

よりも、英語や英語文化の方が知的でカッコいいという風に思う子供がたくさん増えてしまつて、教育熱心な家庭や勉強したいと思う子ほど、日本語や日本文化に関心を持たなくなる可能性が出てこないだろうか。割と親しくしている小学校の校長先生とかもそうおっしゃっています。

もう一つは、拙著の『英語化は愚民化』の中にもあるように、やっぱり言語というのは人間観とか道徳観というものと深く関係していると思うんです。つまり、英語はいろいろな時も自分のことは「I」で、相手のことは「You」で、先に自己認識があつて、周囲を認識していく言語なんです。だけど、日本語は場面や状況に応じて自分の呼び方が変わる。また、敬語も発達してるから、日本語というのは状況の中で自分を客体化していく言語なんです。だから、言語によって人間観とか世界観とかが違うんですよ。

道徳観でもこれは言えて、やはり英語的な世界だと、最初から自分がしっかり「I」という形でドンとあつて、それは状況に応じてあまり変わらないので、すごい二分法的で、基本的に人間同士の利害対立が前提の社会が

成り立っているんじゃないかと。そういう社会での道徳というのは、利害が対立する個人同士がぶつかり合つて、公正さとか社会正義とかっていう抽象的な原理に沿つて、争いを収めていくというものなんだと思います。だけど、日本の場合は状況を先に認識して、自分を規定していくということが言語に表れているように、日本の道徳っていうのは言語的に表明されずとも、積極的にお互いの欲求とかを修正して、相手と調和させるといふ独特なものだと。そういう意味で、英語の人間観や道徳観と、日本のものはかなり違うと思うんです。これは子育てとか教育の場面でもよく言われていることです。やはり、アメリカの親は子供の言語的自己表現能力や公正さというのをものすごく重視するんだと。日本の親は「思いやり」とか「優しさ」や「素直さ」、または悪いことをしたらすぐに謝るといふ、「反省」の能力みたいなものをものすごく重視しています。

だから、日本の小学校は今でも、素直で優しい、よく気がつく子を作るといふのが英語以外の時間では重視されているのに、英語の時間では、暗黙裏に自己主張みたいなものを

重視して、そっちの方がカッコいいという印象を与えると、子供はどっちが本当なのか分からず、混乱するのではないかと思います。

僕はこのことを「ダブルバインド」と表現していて、日本の子供って結局ダブルバインドにならないのかと心配しています。要するに、単に言語はツールではなくて、文化とか道徳観にも影響するので、特に小さな子に教える時は十分に気をつけるべきではなからうかと思うんです。

エリートVS庶民という構図の格差社会が進む可能性がある

小学校で英語が正式教科になれば、中学入試で必ず英語力が問われると思います。二年後から私立、国立の中学受験に英語が入ってくるわけです。すると、多分都市部の教育熱心で裕福な家庭は、子供を夏休み等に短期留学させると思うんですね。あるいは、外国の小学校に入れてしまおうとする家庭も増えると思います。そうすると、まさに10年後くらいに、「学校教育は英語で受けました」みたいなエリートたちが増えてくるのではない

かと思っています。

それによって、一つは格差社会が進行して、教育格差が広がる可能性があります。もう一つは庶民と、いわゆるエリート層の考えが異なってくるのではないかと思います。小学校で英語を正式教科化するという事は、多分それに拍車がかかるんだと思います。

日本には日本らしい教育のあり方がある！

最後に、「日本人は主体性や批判的思考能力は昔からなかった」というのをよく聞くんですが、それはポリティカルコレクトネス（政治的に正しいということ）とは言えないと思います（笑）一種のヘイトスピーチですよ（笑）日本人は少し自虐的すぎだと思えます。私は日本人にもそのような能力はあるけども、欧米のものとは形が異なります。つまり文化によって形態が異なると思っています。僕は、カール・ポパーという哲学者が好きで、彼は言語をとっても重視しています。彼は人間が批判的なのは、言葉で言語化して自分の外に出し、自分の考えをきちんと文章化して書き留めるからだと言います。そして、書

き留めたものを見るというのは、つまり、自分の考えを客観化して見つめて修正していくことで、自己批判的になるからなんだと。特に、批判的思考能力はかなり重要で、人間が動物と違うのは、言語によって自分と自分の考えを切り離せるからだと言います。だから人間が理性的になるには言語がきちんと使えなければいけないのです。

ただ、これはある意味欧米の考え方で、日本の自己批判というのは他のやり方だと思っています。そういう点では、彼の意見に馴染めないところはあります。日本の場合、他者の目を内面化して、その他者の観点から自分を見つめ、それによって自分を客観化することを重視します。だから、人の気持ちがよくわかる子を作ろうとします。

主体性についても、日本人は人の目、すなわち世間様の目ばかりを気にして、同調主義的だとよく言われますが、本来の日本の道徳って世間様では留まらないんですね。一つは、「お天道様」、もう一つは「死者の視点」というのが本当は意識されなきゃいけないと思います。例えば、後者に関して、小泉八雲は、日本人は、生活の中で常に死者が自分を見て

いるというのを意識していて、それを子供にも教えたので、日本文化を、「死者が支配する文化」と言いました。柳田國男^{やまだくにお}も、日本人の死生観というのは、死んでも遠くに行つてしまわずに、山の上とか、自分の近くで、ご先祖様とか死んだ人たちが自分を見ているというのをとても強調しています。だから、昔は単なる世間様だけで終わらなかったんですよ。

戦後あるいは明治以来、日本人はこのような自分たちの道徳を忘れ、とても矮小化してきたのではないかと思います。もちろんアメリカ等、外国のやり方に学ぶのも大切なのですが、自分たちの文化や伝統にもっと注目して、日本人が身に付けやすい主体性や批判的思考能力を伸ばすための教育改革を考えても良いのではないかと思います。アメリカの流行に乗るとするのは「忖度」であつて、それこそ批判的思考能力がないんじゃないですか。

(1年…小林彩葉)



施光恒 (せ てるひさ)

1971年、福岡市生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科を卒業後、同大学院の博士課程に進み、博士課程2年時から1年間イギリス、セイロン大学に留学し、Master of Philosophy の修士号を取得。帰国後、慶應義塾大学の博士課程に戻り、2001年に法学研究科後期博士課程を修了。2003年秋から九州大学に勤務。専門分野は政治哲学・政治理論、特にリベリズムの理論やナショナリズムの理論で、欧米の政治理論を日本にどう馴染ませるかということに関心がある。そこから日本文化にも目を向けるようになり、人権教育・有権者教育といった、いわゆる公民教育、シティズンシップ教育についても研究をするようになった。

著作…『リベリズムの再生―可謬主義による政治理論』・

『英語化は愚民化―日本の国力が地に落ちる』・

『本当に日本人は流されやすいのか』

研究活動…『日本の人権授業における宗教・文化的土台』等、日本的な自律性をテーマにしている。



施光恒著
『英語化は愚民化―日本の国力が地に落ちる』
集英社新書 (2015年7月刊)



施光恒著
『本当に日本人は流されやすいのか』
角川新書 (2018年5月刊)